

## 看護ケア理論における現象学的方法

——ナミン・リー「現象学と質的研究の方法」に寄せて

榊原 哲也

### 一 看護ケア理論における現象学的アプローチと現象学的方法

看護ケアに関する質的研究の一つの方向として、「現象学的方法」を用いた「現象学的アプローチ」が注目を集めている。欧米では一九八〇年代から現象学に基づく看護ケアの哲学的解明ないし基礎づけが行われるようになり、我が国でも一九九〇年代に入って看護ケア理論においてさまざまな現象学的アプローチが試みられるようになってきた。渡邊美千代らの研究によれば、我が国において一九九〇年以降、現象学を用いた看護研究が顕著に増加したことは、統計的にも裏づけられるようである<sup>1)</sup>。

けれども改めて、看護ケア理論における「現象学的アプローチ」とは何か、と問うてみると、その内実は必ずしも一様ではない。二〇世紀初頭にフッサールによって創始された「現象学」は、その後、ハイデガーやメルロリポンティらに受け継がれて、「現象学運動」と呼ばれる一大思想運動となり、現代哲学の主要な一潮流

をなすにいたったが、<sup>2</sup> 各々の現象学者によって、またその思索の時期によって、「現象学」の内容は少しずつ異なっており、看護ケア理論で用いられる「現象学的方法」がそのいずれに由来するものであるかによって、「現象学的方法」の内実も少しずつ異なってくるからである。<sup>3</sup>

『死生学研究』本号に掲載されているナミン・リー「現象学と質的研究の方法」は、こうした状況のなか、質的研究一般に対して現象学がいかなる位置を占め、またいかなる役割を果たしうるのかに関する一つの包括的な見通しを与えてくれる好論文である。以下、まず始めに著者とこの論文の内容について、簡単に紹介したい。

## 二 著者ナミン・リーと論文「現象学と質的研究の方法」

ナミン・リー(이남인)氏は一九五八年生まれ。ドイツ・ヴッパータール大学のクラウス・ヘルト教授のもとで哲学、とりわけフッサール現象学を専攻。博士の学位を取得して、現在はソウル国立大学人文大学哲学科の教授を務める世界的に著名な現象学者である。ドイツ語で書かれた彼の博士論文は、『エトムント・フッサールの本能の現象学』(Edmund Husserls Phänomenologie der Intentione, 1993)として出版されたが、これまでほとんど注目されてこなかったフッサール現象学における「本能」ないし「本能志向性」の問題に光を当て、未公開の遺稿を駆使しつつその内実を明らかにした本書は、世界的に注目を浴びた。フッサール現象学を「静態的現象学」と「発生的現象学」とに明確に区分し、各々の方法の特徴を明晰に整理した上で、「本能」の問題を「発生的現象学」において「発生的方法」によって主題化していくそこの鮮やかな議論展開は、当時、本書をひも解いた筆者にもきわめて強い印象を残した。『死生学研究』本号に掲載された論文「現象学と質的研究

の方法」も、フッサール現象学とその方法を幾つかの段階に明確に区分することによって、質的研究の現象学的方法に対するさまざまな批判を吟味し、現象学の諸段階と質的研究の方法との関係を明晰に整理していくところに、その大きな特徴がある。

彼によれば、フッサールが用いている「現象学的還元」の方法は、フッサール自身が論じているよりもさらに細かく、(一) 事実に「現象学的心理学的還元」、(二) 形相的「現象学的心理学的還元」、(三) 事実に「超越論的現象学的還元」、(四) 形相的「超越論的現象学的還元」、(五) 形相的還元の五種類に分類されるべきである。それゆえ、あらゆる種類の本質を把握するための中立の一般的方法である(五)を除いた四種類の還元に対応して、体験の現象学的研究にも、(i) 事実に「現象学的心理学的研究」、(ii) 形相的「現象学的心理学的研究」、(iii) 事実に「超越論的現象学的研究」、(iv) 形相的「超越論的現象学的研究」の四種類が、可能性として存在しうる(第二節)。彼は、このように体験の現象学的研究の可能な諸段階を明確に区分した上で、(体験の現象学的研究は、そこで用いられている現象学的還元が超越論的現象学的還元ではないがゆえに、フッサールの意味で「現象学的」とは言えない)とするペイリーの批判(第三節)や、体験の現象学的研究を形相的研究に限ろうとするヴァン・マーンの見方(第五節二)を退けていく。そしてまた、そうしたなかで、例えばジョルジュの方法が、体験の形相的「現象学的心理学的研究」として位置づけられ(第四節)、他方、ベナーの『看護論』の試みは、「解釈学的方法」を用いた体験の事実に「現象学的心理学的研究」として位置づけられるのである(第五節三)。

ナミン・リーはこのように現象学的還元の方法を細かく分類することを通じて、体験の現象学的研究を可能な諸段階に明確に区分しつつ、それらすべてを「現象学的研究」として包括的に捉えることによって、通常、現象学的研究と対立させられるグラウンデッド・セオリー・アプローチ、民族誌学的アプローチなども「現象

学的」研究のうちに包摂しようとする（第五章二）。ハイデガーやメルロ＝ポンティの現象学に基づいた現象学的アプローチも、フッサール現象学のうちに潜在的に内在する現象学的研究の可能な諸段階のうちに位置づけられることになるのである。

ナミン・リーのこの論文の韓国語版は、すでに二〇〇五年に韓国現象学会の機関誌に掲載され、<sup>4</sup> それ以来、質的研究を韓国で行っている多くの研究者たちによって引用されていると聞く。ここに掲載された翻訳は、氏自身による英語版からの訳であるが、おそらくこの論文は、フッサール現象学の立場から現象学的な質的研究の諸段階と諸可能性を明確に描き出したものとして、我が国において質的研究を行う人たちにとっても、きわめて有益な一つの見方を提供してくれるものだと思うされる。

ただ、筆者自身は、ナミン・リーの本論文の大きな意義を十分に認めつつも、さまざまな現象学的アプローチを少し別の視点から区分し整理することも可能ではないかと考えている。というのも、ナミン・リーは「一、体験のデータを収集する過程、二、データを分析する過程、三、報告書を書く過程」からなる「体験の現象学的研究」の方法に焦点を絞り、そうした「現象学的方法」に基づく諸研究——すなわち研究者のもつ先入見的な「諸前提」を「括弧に入れ」つつ体験をありのままに認識し理解しようとする、いわば認識論的な諸研究——を、フッサール現象学の可能な諸段階の観点から区分・整理しているが（第一節）、看護ケア理論で用いられる「現象学的方法」とそれによる「現象学的アプローチ」は、必ずしもそのような認識論的な「体験の現象学的研究」に限られるわけではないように、筆者には思われるからである。そこで以下、筆者自身の見方を簡略に提示することで、本稿において筆者に与えられた責を果たしたい。

### 三 認識論的な現象学的アプローチと存在論的な現象学的アプローチ

筆者の理解する限り、看護ケア理論における現象学的アプローチは、大きく分けて、①〈患者の病気体験なしその意味をその人が体験しているがままにありのままに理解し認識しようとするために、現象学的還元の遂行や現象学的態度を求めるもの〉と、②〈病気を体験している患者やその家族、そして彼らにケアという仕方に関わる看護師の在り方を理解し解釈するために、そもそも人間という存在者がどのような在り方をしているのかについて現象学に知見を求めるもの〉という、二つの系統に区分しうる。前者は、フッサールの現象学的認識論の精神を受け継いだものであり、後者は、ハイデガーやメルロ・ポンティの現象学的存在論の知見に依拠するものである。

例えば、本稿冒頭で言及した渡邊美千代らの論文において、統計の「検討対象」となった看護学分野での現象学的アプローチ（解説、研究論文、研究ノート等）のなかで「最も多く使われている」と見なされたのは、ジョルジの研究方法であるが、これは、筆者による右の分類にしたがえば、フッサールの現象学的認識論の精神を受け継いだものと見ることが出来る。彼は「心理学者」[KG, 57]として、現象学を「現象学的心理学」[KG, 57]のレヴェルで受けとめ、「人間の意識」[KG, 57]を、しかもその「心理学的な本質」[KG, 56]を明らかにすることを目指す。そして、「他者」すなわち「被験者」ないし「参加者」からまず「記述」を得た上で [KG, 56]、それに対して心理学的な「前-超越論的還元 (pre-transcendental reduction)」ないし「学的還元 (scientific reduction)」[KG, 57]を行いつつ——ということとはつまり「所与」としての「現象」のうちと与えられていない「仮説」や「仮定」や「理論」などを持ち込まずに [KG, 55]——そこに潜む「心理学的な本質」を「記述」し [KG, 56]、「経験の志向的対象を分節化」[KG, 55]しようとする。「生活世界」[PH,

176f, 179, 184f.] から出発して「現象学的還元」[PH, 196] による「現象学的態度」[PH, 209, 230] をとる。とによつて、被験者の「意識」に「世界」や「状況」がどのように「現象」しているのか [PH, 229f.]、被験者がそれをどのように「体験」しているのか [PH, 219] を被験者の「パースペクティヴ」[PH, 219] からありのままに理解し記述しようとする [cf. PH, 230]。そして、被験者によつて生きられ体験されている「意味」とその背後で働く「志向性」[PH, 207-214] を理解しようとするのである。ナミン・リーは、こうしたジオルジの研究を、前述のように体験の形相的・現象学的心理学的研究として位置づけたが、きわめて正当であろう。ジオルジによる現象学的アプローチは、アメリカでは、ワトソンの看護論における記述的現象学的方法論などにも取り入れられているが、我が国においては広瀬寛子らに受容され、患者の体験世界をありのままに理解し認識するための方法として用いられてきたのである。<sup>11)</sup>

また、ジオルジとは別系統だが、アメリカではケイ・トゥームズもフッサール現象学に基づいた看護理論を展開している。<sup>12)</sup> 彼女もジオルジと同様に、現象学を「心理学的現象学」のレヴエルで受けとめて「現象学的還元」を行う。けれども彼女はそこから医師のとる「自然主義的態度」と患者がとっている「自然的態度」との相違を際立たせ、両者にとつての病いの認識の仕方、の相違、すなわち「病いの意味」の違いを明らかにしている。この試みも、フッサール現象学の認識論的精神を受け継いだものと言つてよいだろう。

これに対して、同じアメリカの現象学的看護理論でも、ベナー／ルーベルの『現象学的人間論と看護』<sup>13)</sup> は、明らかに存在論的である。彼女たちは、「認識論的な問いよりも存在論的な問いの方が先行する」として、「ハイデガーの現象学的人間論」に依拠すると明言する [PC, 41/46]。そして、主として『存在と時間』で展開された基礎的存在論、とりわけドレイファスによつて解釈されたそれに依拠しつつ、メルロ＝ポンティの身体現象学（のドレイファスによる解釈）をも取り入れながら、まずもつて人間がどのような存在であるのかに

ついでに「現象学的人間観」を描き、そこから看護の在り方を探求しようとするのである。原題 (*The Primacy of Caring*) が示すように、彼女たちは、ハイデガーの人間存在論の中心概念である「気遣い」(Gorge / care) を自らの現象学的人間観の中心に据えて看護理論を展開するが [PC, 116/117]、このような現象学的アプローチは、ナミン・リーが与えた区分——すなわち「他者の体験」や遠い過去の自らの体験を「解釈」によって「間接的」に「把握」する「解釈学的方法」によるところの、認識論的な「事象的—現象学的心理学的研究」という区分(第五節三を参照)——には容易に収まりきらない存在論的射程をもつ。彼女たちの現象学的人間観と看護論の内実については、すでに別の機会に立ち入って論じたことがあるので、<sup>14</sup> そちらを参照願いたい。

ベナー／ルーベルの他にも、存在論的な現象学的アプローチに分類されうる研究は少なからず存在する。ここではそれらのなかから我が国における優れた研究を一つだけ挙げておきたい。西村ユミの『語りかける身体』<sup>15</sup>である。本書は、「植物状態」、つまり「一見、意識が清明であるように開眼するが、外的刺激に対する反応、あるいは認識などの精神活動が認められず、外界とコミュニケーションを図ることができない状態」[KS, 15]と定義されるような状態にある患者への看護実践のあり方を現象学的に明らかにした研究だが、ここでは、人間の身体がどのような在り方、方をしていのかを解明したメルロ＝ポンティの身体現象学(現象学的身体存在論)の知見が利用されている。彼女は「植物状態患者と看護婦との、はつきりとは見てとれない関係」[KS, 217c]と交流を明らかにする際に、〈人間の身体同士が「間身体性 (intercorporeité)」 [KS, 170f.]と「在り方、方で相互に交流している」とするメルロ＝ポンティの思想を援用する。メルロ＝ポンティによれば、私と他者とがいまだ分化していない「(身体)の原初的地層」[KS, 159]、「前意識的な層」[KS, 183, 230]においては、身体同士が「運動志向性 (intentionnalité motrice)」[KS, 154]を働かせ合い、それらが相互に反転しうるような在り方、(相互反転性 (réversibilité)) [KS, 158]) をしているが、西村はこうした現象学的身体存在論を

手がかりにして、「視線が絡む」、「手の感触が残る」といった看護師の体験を鮮やかに解明しているのである。<sup>16</sup>

さて、以上のように、筆者の理解によれば、看護ケア理論への現象学的アプローチは、大きく分けて、①〈患者の病気体験ないしその意味をその人が体験しているがままにありのままに理解し認識しようとするために、現象学的還元の遂行や現象学的態度を求め、フッサール現象学の認識論的精神を受け継いだもの〉と、②〈病気を体験している患者やその家族、そして彼らにケアという仕方に関わる看護師の在り方を理解するために、そもそも人間という存在者がどのような在り方をしていくのかについて、ハイデガーやメルロ＝ポンティの現象学的存在論に知見を求めもの〉との二つの系統に分類しうる。そして、①に属する「体験の現象学的研究」だけでなく、②の存在論的な現象学的アプローチも、その「存在論的」側面の意義を十分に認めることが大切ではないかと、筆者は考えるのである。

筆者が存在論的な現象学的アプローチを重要だと考える理由を、ここでは以下のように述べておきたい。

筆者はここ十年近く、看護系の大学や大学院、専門学校等で「看護の現象学」ないし「看護の哲学」の授業を行い、看護ケア理論における質的研究の重要性を強調してきた。ところが、看護における質的研究には、すでに述べたように、通常、現象学的アプローチのみならず、グラウンデッド・セオリーや民族誌学(ethnography)的方法など、さまざまなものがあると考えられており、このうち質的研究方法としてよく知られ、よく用いられるグラウンデッド・セオリー・アプローチは、もともと社会学の方法論として開発されたものであって、観察や記述を通じて収集されたデータに基づいて、そこからコード化、他の事例との比較による仮説設定とカテゴリー化などの作業を通じて、社会学的な人間関係を分析し認識しようとするものなのである。無論、この方法によって明らかになることは少なくないし、また重要でもある。しかしそれだけでは、西村も指摘するように、観察や記述によって〈見て取ることでできたデータ〉に基づく概念化しかできず、



〈はつきりとは見て取ることのできない人間の在り方〉にまでは、考察が届かないのである [KS, 334]。看護におけるケアしケアされる関係はしかし、必ずしも観察や記述によつてはつきりと認識できる関係だけに尽きるものではない。とすれば、このような関係を根拠から理解しようとする看護論は、〈観察や記述によつては明瞭に認識できないような次元も含めた人間存在に関する深い哲学的洞察〉とそれによる〈基礎づけ〉をも必要とするのではなからうか。この点で、ハイデガーやメルロ・ポンティの現象学に基づく存在論的な現象学的アプローチは、その存在論としての意義を十分に認められるべきだと考えられるのである。

無論、そうは言つても、認識論的な現象学的アプローチの重要性が、そのことによつて減じてしまうわけではない。存在論的な現象学的アプローチが、観察や記述によつては明瞭に認識できないような次元をも扱うとすれば、それが独断論に陥らないようにするためには、やはり、当事者が無自覚のうちに前提しているかもしれない先入見に細心の注意を払い、〈当のことがいかにして認識されるのか〉という認識論的な視点を忘れてはならないと考えられるからである。実際、「基本的にメルロ・ポンティの哲学に依拠し」、患者の存在の仕方に基づいて、その経験の意味を捉えようとしたトーマス／ポリオの存在論的な現象学的アプローチは、<sup>18</sup>「謙虚に患者の生活世界に入つていって」その「生きられた体験」の「意味」を「患者の一人称的な視点から」理解するために、問題となる現象に関するあらゆる理論、知識、前提、思い込みをすべて「括弧にくくる」というフツサールのなエポケーの方法を、「括弧にくくる面接 (Bracketing interview)」として、まずもつて要請している [LP, 7/18f, 32-34/54-56]。認識論的な現象学的アプローチと存在論的な現象学的アプローチとは、双方とも必要なのであり、両者は総合されるべきなのである。

ナミン・リーによつて示された「体験の現象学的研究」の諸段階に関する明晰な区分を踏まえつつ、存在論的な現象学的アプローチがもつ独自の意義をも視野に入れながら、看護ケア理論において「現象学」と「現象

学的方法」が果たしうる役割をさらに考え抜くこと、そしてそのなかで認識論的な現象学的アプローチと存在論的な現象学的アプローチがいかに総合されうるのかを熟考し、その総合を実現してもいくこと——それこそが今後の私たちに課せられた一つの大きな課題であると考えられる。

#### ■付記

本稿は、死生学研究編集委員会の求めに応じて執筆された、ナミン・リー氏の論文「現象学と質的研究の方法」への解説を兼ねた小論であるが、筆者がすでに公にした下記の論文の一部に大幅な加筆と修正を施して成ったものであることをお断りしておく。

榊原哲也「看護ケア理論における現象学的アプローチ——その概観と批判的コメント——」、『フッサール研究』第6号(平成一九年度科学研究費補助金(基盤研究B)「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」資料集)、二〇〇八(平成二〇)年三月発行、九七〜一〇九頁。

#### ■註

- 1 渡邊美千代、渡邊智子、高橋照子「看護における現象学の活用とその動向」(『看護研究』増刊号、第三七卷第五号、二〇〇四年、五九〜六九頁)。
- 2 Cf. Herbert Spiegelberg, *The Phenomenological Movement. A Historical Introduction*, Third revised and enlarged edition, with the collaboration of Karl Schuhmann, Hague / Boston / London: Martinus Nijhoff, 1982. 邦訳：『現象学運動』[上][下]、世界書院、二〇〇〇年。
- 3 看護ケア理論に用いられる「現象学」について、筆者は概説を試みたことがある。榊原哲也「現象学とは何か——

- 「緩和ケア理論における現象学的アプローチの理解のために——」(『緩和ケア』第一七巻第五号、二〇〇七年九月、三八六〜三九〇頁)。
- 4 In: *Research in Philosophy and Phenomenology*, Vol. 24, Spring 2005, Korean Society for Phenomenology, pp. 91-121.
  - 5 Nam-In Lee, "Phenomenology and Qualitative Research Method", in: 『「のち・からだ・コト」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み』(平成一八年度〜二〇年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、研究代表者 榎原哲也)、平成二二年三月、三四三〜三六二頁。
  - 6 アメリカのさまざまな現象学的アプローチを、フッサールに導かれた「デュケイン学派」とハイデガーに導かれた「現象解釈派」に分ける試みが、すでにコーエンとオマリイ(M. Z. Cohen & A. Omerly, "Schools of phenomenology: implications for research", in: J.M. Morse (ed.), *Critical Issues in Qualitative Research Methods*, Thousand Oaks (California): Sage, 1994, pp. 136-156) へ受け継がれたクロウエンとウマロー(Jimmy Holloway & Stephanie Wheeler (eds.), *Qualitative Research for Nurses*, Oxford (UK): Blackwell, 1996, 邦訳: 『ナースのための質的研究入門——研究方法から論文作成まで』野口美和子監訳、医学書院、二〇〇〇年)によってなされているが、筆者としては、認識論的な現象学的アプローチと存在論的な現象学的アプローチの二つの系譜に分けることを提案したい。このように分類することによって、メルロポンティに依拠した現象学的アプローチが、先行研究における分類によるよりも、明確に位置づけられるように思われるからである。
  - 7 渡邊美千代、渡邊智子、高橋照子前掲論文、六五頁、六二頁。
  - 8 Cf. Amedeo P. Giorgi 「看護研究への現象学的方法の適用可能性」(『看護研究』増刊号、第三七巻第五号、二〇〇四年、四九〜五七頁)。以下、引用は略号Kと頁数とで示す。なお、本稿脱稿後、ジョルジが自らの研究方法をまとめた新著(Amedeo Giorgi, *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*, Pittsburgh: Duquesne University Press, 2009)を入手した。しかし、校正の段階では、この新著の内容を本稿に反映させることはできなかった。のちの課題としたい。
  - 9 Amedeo Giorgi, *Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach*, New York: Harper & Row, 1970; 早坂泰

- 次郎監訳『現象学的心理学の系譜』、勁草書房、一九八一年（引用は以下、略号PHのあとに邦訳の頁数を示す）。ただしオルジは、「現象」をまつたく何の「先入見」も「前提」もなしに知ることはできないのであるから [PH, 216, 166]。『現象学者』もまた自らの「パースペクティブ」のうちにあることを自覚し [PH, 216]。明らかにすべきことが必要であるとも述べられている。
- 10 Jean Watson, *Nursing: Human Science and Human Care: A Theory of Nursing*, New York: National League for Nursing, 1988. 邦訳：『ワトソン看護論——人間科学とヒューマンケア』稲岡文昭、稲岡光子訳、医学書院、一九九二年。邦訳二二五～二二二頁。
- 11 広瀬寛子「看護面接の機能に関する研究——透析患者との面接過程の現象学的分析」（その1）（その2）（その3）（『看護研究』第二五巻第四号、一九九二年、三六七～三八四頁・第二五巻第六号、一九九二年、五四一～五六六頁；第二六巻第一号、一九九三年、四六～六六頁。）
- 12 S. Kay Toombs, *The Meaning of Illness: A Phenomenological Account of the Different Perspectives of Physician and Patient*, Dordrecht / Boston / London: Kluwer, 1992. 邦訳：『病いの意味——看護と患者理解のための現象学』永見勇訳、日本看護協会出版会、二〇〇一年。
- 13 Patricia Benner & Judith Wrubel, *The Primacy of Caring, Stress and Coping in Health and Illness*, Menlo Park: Addison-Wesley, 1989. 『現象学的人間論と看護』難波卓志訳、医学書院、一九九九年。以下、本書からの引用箇所は、略号PCのあと原著、邦訳の頁数を併記することによって示す。
- 14 榊原哲也「死生のケアの現象学——ベナー／ルーベルの現象学的看護論を手がかりにして」、『死生学研究』二〇〇五年春号、死生学研究編集委員会編、二〇〇五年、八三～九八頁。
- 15 西村ユミ「語りかける身体——看護ケアの現象学」、ゆみる出版、二〇〇一年。以下、本書からの引用箇所は略号KSと頁数によって示す。
- 16 西村は、Tセンターで植物状態患者への看護を実践している看護師Aさんと自らとの「対話」から得られたAさんの看護経験を、メルロ＝ポンティの現象学に基づいて分析しているが、例えば「視線がピッと絡む」というAさんの

体験については、次のような考察を展開している。

患者の住田さんの目と視線は、単に五感の一つである視覚の働きとして機能しているのではなく、「視覚に限定されない感覚」として働き出していたのであり、目の働きは「事物にせまる或る種の能力」として、つまり「実在するものへの或る歩みゆき」である『運動志向性 (intentionalé motrice)』として働き出していた [KS, 154]。したがって「絡む」とは、「住田さんから向かってくる」この『運動』に導かれた〈身体〉の、その感覚的な経験」であって [KS, 154]、それは、「目でものを見る、つまり視覚が対象をとらえる機能として働き出す以前の未分化な知覚」、メルローポンティの言う『原初的地層における『共感覚』』 [KS, 155] なのである。

また、Aさんは住田さんとコミュニケーションを図ろうとして目を「覗き込む」 [KS, 156] のだが、この行為も「住田さんの目の奥深いところまで入り込んでいこうとする〈身体〉の『運動志向性』として働き出している」。「視線がピッと絡んだのは、住田さんの『運動志向性』を瞬時に感じ取ったこと」を示しているのである [KS, 157]。ここでは、「眼差し(視線)によって触れているはずの私が、逆に触れられているという『相互反転性 (réversibilité)』」 [KS, 158] が生じている。「植物状態患者と『視線がピッと絡む』といういとなみ」 [KS, 159] は、「まだ私とも他者ともいえないような『根源的な心』」 (On primordial) の『知覚』 [KS, 159]、『私』と他者とが未分化な原初的地層における知覚経験 [KS, 159]、〈身体〉の…意識される手前の層における知覚経験 [KS, 159E] なのである。

『視線が絡む』という経験は、患者の〈身体〉がこちらに向かってくるという運動志向性であり、この患者の志向性が看護婦の相手に関わろうとする志向性を喚起し、これに促されて看護婦は患者の『ケア』に向かおうとしたが、『視線が絡む』という〈身体〉の原初的地層における知覚経験は、看護の営みが動的に生成されるその根源にあるものとして働いている [KS, 162] のである。

また、「手の感触が残る」というAさんの体験については、次のように考察している。

Aさんは、「コミュニケーションの場を確保」しようとして住田さんの「掌の内側に」入り込んだが、その場合、「住田さんの手に向かうAさんの触れる手が、彼の手に触れた途端、その手は触れられる手に変わる。そして握手をしている状態になると、どちらが触れてどちらが触れられているのかの区別は全く不明瞭になる」 [KS, 177]。この

ような、「触れつつも触れられてくる感覚」、「触れらるること」と『触れられること』が区別できないような場における経験」[KS, 177] におおづては、「間身体性 (intercorporeité)」[KS, 170] が成立してゐる。つまり、「手の接触面を軸に、両者の〈身体〉が力動的に相互反転することによつて」、「間身体的存在が開かれた」のだ [KS, 172]。そしてこの「触れられる手による触れる手の反省」という動的な相互反転」が、「ケアを実践する者が逆にケアされるといふ関係の反転」をもたらす [KS, 172E]。だからこそ、Aさんは、「住田さんの『優しい手の感触』に『癒され』たり『なごまれる』』といった経験をしたのである [KS, 172E]。

17 Cf. マチリン・M・レイニンガー編集『看護における質的研究』近藤潤子、伊藤和弘監訳、医学書院、一九九七年。

18 Sandra P. Thomas & Howard R. Pollio, *Listening to Patients. A Phenomenological Approach to Nursing Research and Practice*, New York: Springer, 2002. 邦訳：『患者の声を聞く——現象学的アプローチによる看護の研究と実践——』川原由佳里監修、エルゼビヤ・ジャパン、二〇〇六年。本書からの引用は、略号「P」のあとに原著と邦訳の頁数を併記することによつて示す。

(さかきばら・てつや 東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授)